所長挨拶

機能として，工房として―メディアセンターの新たな意義

青木（あおき）　節子（せつこ）
（湘南藤沢メディアセンター所長）

欧米では，大学ランキングを決める要素の１つとして図書館の充実度が含められている。知の習得と学の先端を切り拓く研究の双方のためには，総記，学術誌，単行書をはじめとして学び研究するための良い道具が必須のものであるという了解が社会に確固として存在するからであろう。

その道具の具体的な内容は学の領域により異なることはもちろんであるが時代による変遷も小さくないことは，慶應義塾大学「メディアセンター」という名称にもあらわれているといえよう。「印刷された紙」が重要なのではなく，印刷物に刻みこまれている知的生産物そのものを取り出して変質しにくい媒体にとどめ，それを可能なかぎりさまざまな状況下の共同体の人間にいつでも提供しようとする姿勢が「メディアセンター」という名称に込められていると考えられるからである。

慶應義塾大学の他のキャンパスと同様，湘南藤沢キャンパスも，よりよきメディアセンターを目指して日々努力している。基本はもちろん学生の学習に有益な情報を取り揃えておくことと，教職員・学生の研究のための資料を使いやすい形で用意することである。いかなる分野の書籍・雑誌や電子データベース・ジャーナルをどれだけの量，購入し保存すべきか。電子データ・情報と紙の書籍や雑誌との割合はどの程度が適切なのか。それは，予算の制約を前提に，必要性，使いやすさ，入手しやすさ，保存の確実さなどを総合的に考慮して決まるものであろうが，書庫の容積や建物全体としての美的な観点という要素も無視できないであろう。「メディアセンター」は「メディア」の充実とともに，人間が集う「センター」の進化も担っているからである。ここにメディア「センター」の妙味があるように思える。逆説的ではあるが，情報がより電子的に提供されるようになるほど，つまり，メディアセンターの機能としての側面が強くなるほど，建物としてのセンターはより美しく，憩いやすく，また，創造と刺激に満ちた空間であることが要求されるようになってきているといえそうである。

確かにメディアセンターは，ネットにつながる電子媒体が中心になるほど，場所というより機能としてよりいきいきと存在する側面があることは否めない。ICT技術の発展・普及により遠隔接続の方式も，データベースの利用方法もますます容易になっている。私の経験では，約15年前は，自宅からデータベースを獲得するためには一定の技術とこつが必要であった。何度もメディアセンターのコンサルタントに教えを乞うたものである。また，私の専門である法律のデータベース「レクシス」はさまざまなキー操作を覚えないと使えなかった。今では，グーグル検索と同じとまではいえないがいわゆるインターネット検索の延長という気持ちで十分使いこなせるようになり，遠隔接続も操作の円滑さもそのありがたさが意識されることすらなくなった。そして，後から入学する学生ほど，メディアセンターにおける学術情報は，そこに足を運んで得るものではなく，PCやスマホで気軽にその機能を享有するものとなっている。

とはいえ，メディアセンターは，機能のみに収斂していくことはなかった。相変わらず多くの学生が，ある意味かつてより多くの学生がメディアセンターで時を過ごしている。それは，学生を中心とする大学関係者がより過ごし易い環境が工夫されているからであろう。湘南藤沢では，静謐が要請されるエリアと議論や共同作業が可能なエリアに分けられている。また，多言語を楽しみ学ぶ空間が用意され，時代の要請に合致したものとして歓迎されている。去年から館内で飲み物を購入することもできるようになったことも重要な企てである。

しかし，なんといっても，最近，ファブスペースに3Dプリンターが数台置かれ，学生が自由に利用できるようになったことは大きい。3Dプリンターは社会の在り方を根底から揺さぶる可能性を持った機器だからである。多くの学生がセンターに足を運んで新たな体験に身をゆだねる。近い将来には，個々人の製造工房としても機能するようになるかもしれない。